

努力と挫折の先に

代田中・2 細川 千恵実

「出演順五番、豊川市立代田中学校。ゴールド金賞。」
この瞬間、会場は私たちの歓喜の声に包まれた。

吹奏楽コンクールの県大会に出場するには、必ず地区予選を突破する必要がある。そのため必須条件は、金賞を受賞すること。けれど、金賞を受賞したら県大会に出場できるというわけではない。金賞を受賞した団体のうち、一つや二つの限られた団体しか出場することができないのだ。つまり、県大会常連校などの強豪団体よりも完成度の高い演奏をしないと県大会に出場することはできない。県大会に出場するために、すべての団体が一番を目指して本気で競い合う。次の大会に出場する権利が与えられる、極めて重大なこの大会に手を抜く団体なんて、絶対にいない。先日行われた一回目の地区予選では思うように結果を出せず、銀賞という悔しい結果で終わってしまった。地区予選は毎年二回出場することができる。つまり、残り一回のチャンスを逃せば三年生は引退してしまう。顧問が変わり、県大会への希望をもつことができるほど、私たちは成長した。このメンバーで県大会に出場したい。「金賞を受賞して、県大会に出場する」という去年から続くこの目標を何としても達成させたい。その思いで私たちは今年最後のチャンスをつかみ取るため、練習を重ねた。私たちならいける、そう信じていた。

練習はきつくてつらいときがあった。何回やっても上手くいかなくて、どうすればいいのか分からなくもなかった。ワンプレイヤーに選ばれたとき、努力が報われた気がして本当に嬉しくて、責任をもって吹ききろうと心に決めた。そのはずなのに、この前向きな気持ちもプレッシャーに負けて、「吹くのが怖い」と感じてしまうように

なった。気持ちの行き場がどこにもなくなって、自分を責めるしかなくて、自己嫌悪に陥りそうにもなった。けれど、私を支えてくれたのは友達からの声援と、金賞を受賞するという目標だった。「自分たちで決めた目標を、自分で諦めてどうするんだ」と自分を奮い立たせて練習に参加した。深呼吸をして、楽器を構えて、音を出す。それでも上手くいかないこともあるけれど、不安もプレッシャーもなくなっただけではないけれど、日々私の音は変わっている気がした。通し練習で、誰もが一度もミスをしなかったことなんてない。県大会で、他の団体と同等に競い合える実力だと胸を張って言えるわけでもない。けれど、部員一人一人の活気と県大会出場を望む思いは、どこにも負けないと自信をもって言える。この団体の中でワンプレイヤーに選ばれたんだと思うと、なんだか誇らしい。私にしかできないことを全うしよう。いつの間にかつらい思いは消えていて、私の頭にあるのは「楽しみ」という気持ちだけだった。

気がつけば本番前日。何となく、いつもよりみんな緊張しているように見えた。けれど、私は違う。もちろん緊張やプレッシャーが一ミリもないわけではないけれど、そんな気持ちをかき消すくらい明日の本番が待ち遠しく感じた。練習が終わると、私が担当するトランペットの講師の先生に声をかけられた。

「千恵実ちゃんが努力してきたのはちゃんと伝わってるよ。明日は楽しんで演奏するだけだね。」

ずっと見ていてくれたことが本当に嬉しくて思わず涙が出そうになったけれど、私は元気に返事をした。

「はい、頑張ります！」

そして、ついに本番当日がやってきた。会場に着き、最後の練習が始まる。ひたすら音を出して、いつも通りの自分の音になるようにと緊張をほぐす。最後の最後まで顧問は変わらないな、とふと思う。私たちが緊張しないようにだろうか。練習は流れるように終わって、舞台裏へと移動する。「緊張するね」なんてみんなが話してい

る。どれだけ練習しても、緊張がなくなることはない。どれだけ応援されても、自信をもって吹ききくことはできない。昨日まではこの緊張感を克服したと思っていたけれど、やっぱり克服していないみたいだ。心なしか手が震えている気がする。ワンピースに選ばれた四人で最後の確認を行い、深呼吸をする。ふと、顧問に話しかけられた。

「緊張なんかいらん。楽しんでやれ。」

顧問のこの言葉には、一点の曇りもなかった。自分を気にかけてくれた嬉しさと同時に、肩の力がふっと軽くなったように感じた。

とうとう舞台上上がる。演奏が始まる前の準備時間は、四回目でもなかなか慣れない。周りの緊張を、感じとってしまいうから。準備を終えて席につくと、アナウンスが流れた。顧問が礼をする。拍手が聞こえる。ああ、始まるんだ。

指揮が始まった。最初からミスをしてしまった。けれど、まだ先はある、振り返るな。そう自分に言い聞かせ、演奏を続けた。とうとうワンピースで吹く箇所だ。手前の木管アンサンブルを聞く、消えかけていた緊張が再び現れ、手が震えた。それでも私は負けまいと大きく息を吸い、演奏を始めた。顧問の指揮に合わせる。私の音だけが会場に響く。緊張と不安で、きつと私は変な顔だったに違いない。けれど、私は吹ききった。これまでのすべての思いと経験と努力を、自分の音にのせて。

その後の演奏はあつという間に終わって、運命の結果発表がやってきた。頭が真っ白になるくらいの緊張で上手く吹けるわけがないと分かっていた。それでも私は、金賞が欲しいと思った。その結果に見合う努力はしてきたから。

「出演順四番、〇〇中学校。B銀賞。」

次だ、という緊張と「金賞が欲しい」という淡い期待が、私の頭を埋め尽くした。

「出演順五番、豊川市立代田中学校。ゴールド金賞。」

この瞬間、会場は私たちの歓喜の声に包まれた。頭の整理は追いつかなかったけれど、ただただ嬉しかった。本当に嬉しかった。金賞を受賞したのはたったの四団体。惜しくも、私たちだけ県大会に出場することはできなかった。けれど、その瞬間の私はただ嬉しかった。

学校でのミーティング。顧問が言った。

「金賞おめでとう。」

何気ない言葉だけれど、何度も全国大会へ駒を進めた顧問からすればちっぽけなことかもしれないけれど。金賞を改めて実感するとともに、嬉しさで涙が溢れそうになった。今回の合計点は七十八点だった。前回の合計点は五十七点。本当に成長したんだ、と改めて感じた。けれど、続けて顧問が言った。

「今回の県大会出場校の合計点は八十点だったらいい。」

ということは、あと二点。たった二点というわずかな差で私たちは負けたんだ。嬉しいという気持ちの半分くらいが、悔しさに変わった。たった二点で勝敗が決まって、県大会出場の権利が与えられる。改めてコンクールの厳しさを知った。嬉しさと悔しさと、自分をもっと追い込まなかった苛立ちで、私はついに涙があふれた。

ミーティングが終わると、講師の先生と目が合った。すると私のそばに来てこう言った。

「音、ちゃんと聞こえたよ。よく頑張ったね、お疲れ様。」

嬉しくて、また涙があふれた。こんなに私の成長を横で見守って、自分のことのように喜んでくれる人は初めてだった。この先生に、もっと良い結果を伝えたかった。県大会と一緒に歩いてきてほしい。けれど、それはもう叶わない。この時、私に必ず達成したい目標ができた。

「この顧問と先生たちと県大会に出場する」

この前の大会から二週間。あの嬉しさと悔しさを今でも忘れていない。それでも私は前を向いている。来年こそ先輩たちの思いを引

き継ぎ、この目標を達成するために。